

小児看護教育における学生の子どもに対するイメージの変化

－ 2回の学内演習をとおして －

片川 智子 金城やす子 小島 洋子

I 研究目的

小児看護において、子どもをどのような存在としてとらえるかは、子どもへの対応の仕方に影響すると考えられている。しかし社会構造の変化により、学生が子どもと触れあう機会を持つことが少なくなった昨今では、子どもの生活をイメージすることが困難な場合がある。子どもとの関わりに戸惑う学生も報告され、本学の小児看護実習でもそうした事例を経験することがある。

そこで、小児看護教育では学生が子どもへの理解を深め、子どもに対する肯定的なイメージを持てるようにすることが重要とされ、本学でも学生が子ども本来の姿をとらえ、理解を深められるように、子どもの発達や生活をとらえたビデオ作成や、各種モデル人形を用いた学内演習に取り組んでいる。

研究は、3年間の教育課程の中で、学生の子どもへの理解がどのような経年的変化をもたらしているか、および一つ一つの学習方法が子どもの理解に与える影響について明らかにする目的で現在も取り組んでいるものであるが、今回は2回の学内演習によって思い描かれた学生の子どものイメージを比較検討し、学内演習がもたらした子どものイメージの変化について明らかにすることを目的とした。

II 研究方法

1. 対象 : 平成 16 年に本学看護学科 3 年課程の 2 年に在籍し、小児看護学を履修している学生から無作為抽出した 50 名の学生
2. 調査方法 : 2 回の小児看護学内演習終了後、「実習を終えて描いた子どものイメージ」について、自由記述をしてもらった。
 - 1) 1 回目の学内演習について (以下「演習 1」と称する)
2 年次の 7 月に、小児の日常生活に関する援助技術を学ぶことを目的に、「乳児の身体計測」「乳幼児の衣服の選び方・着脱の仕方」「乳児の清潔」「オムツ交換・パンツのはかせ方」「抱き方」「経口与薬」をモデル人形を用いて体験学習した。
 - 2) 2 回目の学内演習について (以下「演習 2」と称する)
2 年次の 12 月に、診療の補助技術を学ぶことを目的に、「乳児のバイタルサインの測定」「採尿」「保育器内での処置」「吸入」「吸引」「検査の体位」「抑制」「経管栄養」「輸液の管理」について、モデル人形を用いて体験学習した。
3. 倫理的配慮 : 対象者には研究の趣旨を口頭で説明し、自由意志による参加で拒否ができること、無記名で個人が特定されたり、評価に影響するなどの不利益を被ることはないように配慮することを説明し、回収を持って同意を得られたと判断した。

4. 分析方法：1) 自由記述された文章に関して、「学生が描いた子どものイメージ」という視点で意味のある文節に分け、その文節の表現する内容をカテゴリー化する。
- 2) 1回目と2回目の演習のイメージの類似性と差異に焦点を当てて、それぞれの演習がもたらしたイメージの変化と影響について分析する。

Ⅲ 研究結果

分析1) について

2回の演習で学生が記述した子どものイメージを、意味内容の類似する文節に分類すると、29のカテゴリーになった。(表1参照)

(表1) 2回の演習で学生がとらえたこどものイメージの分類

1. こどもはかわいい

演習 1	演習 2
かわいい・愛らしい 無邪気 いつも楽しそう あどけない存在 にくめない 見ていて飽きない 守ってもらうための愛らしい笑顔を持っている 温かい存在 よく笑う	愛らしい

2. こどもは守らなくてはならない

演習 1	演習 2
守ってあげたくなる(守らなくてはならない) 一人では生きられない(何もできない) 誰かの助けが必要 こどもは無条件で愛されるもの	自分自身を守りきれない存在 誰かの手を借りないと日常・社会生活が成り立っていない 思うほど大人ではない 発達が未熟 自分の意志を表現するすべが乏しい 自分で自分のことができない 子どもによっては素直にものを言ったり、行動できない子どももいる

3. こどもは貴重な存在

演習 1	演習 2
大切な存在(大切にしなければならない存在) 貴重な存在 かけがえのない存在 自分の命より大切な存在	

目に入れてもいたくない 生き甲斐 天使のような存在 夫婦の愛の結晶 宝物	
--	--

4. こどもは弱い

演習 1	演習 2
弱い・もろい・かよわい・こわれそう 小さい はかなげに見える 無力	身体的に未熟 大人より怖がり

5. こどもは素直で純粋

演習 1	演習 2
正直 素直 純粋	

6. こどもとのかかわりには配慮が必要

演習 1	演習 2
育てるのに時間と愛情が必要 責任を持って育てていかなければならない 成長発達に応じたケアが必要	子ども同志の社会や世界が作られている点を尊重する NSは知識の他に何か別の感性が必要 NSに必要な感性の基本はこどもが好きであること 周りの大人が協力しなければならない 成人に比べて優しく行わなければならない人たち 大人は手助けするが子どもの成長を妨げるようにやってはいけない 大人と違う配慮、気配りが必要 誠実な態度で関わる必要がある 守ってあげるために自分が動きたくなくなるが、見守る意識も持ちたい 患児の持つ個性を見つけ伸ばすことが成長につながる 子どもだからと思って接するのはよくない 自立を促しながらも甘えさせてあげることが必要 自由を抑制しないことは大切 わがままも成長発達の上で必要

7. こどもは大人を癒してくれる

演習 1	演習 2
癒される存在 癒してくれる なごむ うらやましい存在	

8. こどもには能力がある

演習 1	演習 2
<p>誰も裏切らない 何をやるにも一生懸命 大人とは違うことが多い 本能的知恵を持っている 適応能力も高い 感覚が敏感・大人より敏感・敏感に感じ取っている</p>	<p>大変だけどこどもの方から自分に関わってきてくれる存在 こどもは想像以上にいろいろ考えている 子どもはありのままを話し受け止める 大人の表情をよく見ている 感受性が強い</p>

9. 子どもは苦手 好きでない

演習 1	演習 2
<p>細かなことを知るほど育てられなくなる・ほしくなくなる 近づきたい 自分にとって身近な存在ではない・遠い存在 好きではない 嫌いです いらいらさせる まだ育てるのは無理・まだ母親にはなれない 苦手です 少しうるさくなる時期(5歳くらい)は嫌かもしれない</p>	<p>イライラする存在 小児看護を学んでもよいイメージはない</p>

10. 大人がこどもから学ぶこと

演習 1	演習 2
<p>こどもを見ていると自分も楽しくなる 新しいことをたくさん教えてくれる 自分も一緒に成長する存在 無知のこどもを育てる喜びを感じる 遊びの大切さを教えてくれる 人生の生き方、考え方を考えさせてくれる 命の大切さを教えてくれる</p>	<p>自分への責任感がわいた 関係作りは難しいがおもしろみがある 子育ては嫌になること以上に子どもの成長に幸せがあると思った</p>

11. こどもは目を離すと危ない

演習 1	演習 2
<p>手が掛かる 目を離すと大人が想像できないことをする あぶなっかしい 謎の行動を取る 予測不能な行動を取る 突然騒ぎ出したりする 急にわからなくなる存在 思うがままに行動する</p>	<p>じっとしていられない 大人が見ていないと危ない 注意しなくてはならないことがたくさんある 怖いもの知らず</p>

12. こどもの病気は苦痛が大きい

演習 1	演習 2
	<p>病気のこどもは苦痛や不安を伴っている</p> <p>こどもであってもつらい治療や痛みを伴う検査を受けなければならないことがある</p> <p>年齢によって症状を適切に訴えられない</p> <p>苦痛を言葉で表現できない</p> <p>病気を抱えた子どもは精神的・身体的につらい状況にある</p> <p>病院という場だけでストレスになる</p> <p>治療の意味や我慢が必要なことなどの理解が難しい</p> <p>成人より病気にかかりやすく、変化しやすいもの</p>

13. こどもは一人の人間である

演習 1	演習 2
	<p>子どもは一人の人間だ</p> <p>子どもは一人一人違う</p> <p>子どもとは思うほど幼いものではない(保)</p> <p>発達に応じて理解力も違う</p> <p>大人と身体の細かな部分で異なる</p> <p>子どもにも自尊感情がある</p> <p>一人の人間であることに変わりはない</p> <p>個人差がある</p>

14. こどもは周囲の影響を受けやすい

演習 1	演習 2
<p>周りの環境から影響を受ける</p> <p>どんな風にも変わる</p>	<p>人と人のふれあいが大切</p> <p>大人の関わりが重要</p> <p>接することが情緒的にも影響することがある</p> <p>子どもは小さなことで変化しやすい</p> <p>大人に接するように接してはならない</p> <p>社会に抑圧されやすい立場</p> <p>大人の関わり次第で世界観が変わってしまう</p>

15. こどもへの思い

演習 1	演習 2
<p>こどもを守るために頑張るといふ気持ちでいられそう</p> <p>母親になるために必要なことは身につけたい</p> <p>他人のこどもも暖かく接していきたい</p> <p>虐待は考えられない</p> <p>ずっと一緒にいたい 一緒にいてあげたい</p> <p>一緒に遊びたくなる</p>	<p>素直さをいつまでも持ち続けてもらいたい</p> <p>自分の可能性に向かって成長してもらいたい</p>

16. こどもはわががま

演習 1	演習 2
残酷なところがある にくたらしいところがある 自分が思うようにならないとすぐグズる 困らせる 生意気	わがまま

17. こどもの状況・気持ちを理解することが必要

演習 1	演習 2
どんな気持ちか判断する能力が必要	言葉で話せないから目や表情動作からニーズをとらえる必要がある よく観察することが必要 看護者の観察と予測が重要 どのような対応がその子に必要なか考えることが大切 子どもはこちらが気をつけてあげなければならない 自分の価値観で子どもを見てはいけない

18. こどもはよくわからない

演習 1	演習 2
どこから怒ってよいのかわからない よくわからない 何を考えているのかわからない 何を必要としているのかわからない 気持ちや考えを見極めることが難しい	自分はどんな風に理解したか覚えていない まだ子どもに関してわからないことが多い

19. こどもとのかかわりは大変で難しい

演習 1	演習 2
扱いになれていないとつぶしてしまいそう 育てるのは大変	善悪の判断がつかないので何でもやっちゃって大変 何度注意してもなかなか理解してもらえず大変だった 子育ては喜びもあるが嫌になることもあるだろう 自分にとっては当たり前のことでも子どもに説明するのは難しい 看護の対象としてはとても難しい相手 力加減や表現の読み取りが難しい

20. こどもは成長発達している

演習 1	演習 2
これから成長する人 成長ってものすごい	心の成長もどんどんしている 3歳と5歳では大きな成長が見られた こどもの成長はこんなにも早い いろいろなことを吸収している

21. こどもには未来・希望・可能性がある

演習 1	演習 2
将来を担う 未来の存在 社会を担う 希望に満ちている 輝いている 愛情をたくさん受けている すべてのことがこれからわかる人たち いろんなことに興味を持つ すごいパワーをもっている パワーを与えてくれる 無限の可能性を持つ	多くの可能性を秘めている存在

22. こどもには適切な技術が必要

演習 1	演習 2
	成人と異なり温度湿度などの環境が大事 成人と違い看護技術は工夫が必要 技術操作は慎重に丁寧に適切に行う必要がある 自分の技術を素早くする必要がある 壊れ物のように丁寧にケアをしなければならない 本当の赤ちゃんはもっと大切に扱わないといけない

23. 苦痛の緩和が必要

演習 1	演習 2
	苦痛を和らげることが大切 苦痛を与えず、楽しく生活できるようにするべき 治療時に話しかけたり恐怖心を与えないような配慮が必要 暴れたり泣いたりすることが多いことを考えた処置が必要

24. 子どもは自由である

演習 1	演習 2
自分が大好きな人たち	伸び伸びとしている 子どもは自由

25. こどもに応じた説明が必要

演習 1	演習 2
	子どもであっても十分説明することが大切 説明はその子どもに応じたものでなければならない

26. 親と子の絆は強い

演習 1	演習 2
両親を無条件で愛してくれる	親と子の絆は強い 家族や周囲とのつながりが強い

27. こどもは身近な存在

演習 1	演習 2
年齢の離れた兄弟がいるので身近な存在	

28. その他 <実習で得たこと・感じたこと>

演習 1	演習 2
少子化社会を実感した 本当のこどもを抱く自信が持てた 自分もこどもがほしい(ほしくなった)こどもを早く産みたい 実習をしてこどもについて知らないことがわかった 個々の成長は違うことを実感できた だっこするのが怖かったが少し慣れた おむつ交換は考えていたより簡単 実習でやったことはこれならできるとおもった 以前は苦手だったが授業でいいなあと思うようになった 実習でだんだんこどもに慣れてきた 実習で考えが変わった	人形でも目の前の小さなこどもに何ができるか考えた 人形と実物との違いがはっきりした 人形でも元気に成長してほしいと思った 実習を通してあらためてかわいと思った 保育園実習で愛らしさに再び気づいた イメージは小児看護を学ぶことにより変化した 何歳の子どもはこれぐらいのことができるとういことが実感できた 勉強したことで子どもが恋しく思える

29. その他 <実習で不十分に思ったこと・感じたこと>

演習 1	演習 2
	演習時から実際の子どもを扱うように気をつけて看護するべきだった 子ども一人一人にあわせた看護をするべきだった 人形に話しかけたりもしたが実際にはもっと言葉かけが必要 技術のことはかり考えてこどもについて考える余裕がなかった 実際のこどもはもっと怖くてうまく扱えないのではないかと思った 子どもにちゃんと検査の意味がわかっているのかわかりにくかった 子どものイメージとして新たに沸くことはなかった 人形ではどんな体位が楽か、つらいか伝わってこない 人形は変な動きをしていた 前回と違い疾患のある児のイメージが強く、子どもの実感がわかなかった あの実習を通して子どもへのイメージが変わることはない 人形では実際の子どものように扱うことは無理

今回「28. 実習で得たこと・感じたこと」「29. 実習で不十分に思ったこと・感じたこと」に分類した2項目を除く、27のカテゴリーを、記述量の多かった順に挙げると次のようになった。

1. こどもはかわいい
2. こどもは守らなくてはならない
3. こどもは貴重な存在
4. こどもは弱い
5. こどもは素直で純粋

6. こどもとの関わりには配慮が必要
7. こどもは大人を癒してくれる
8. こどもには能力がある
9. こどもは苦手・好きでない
10. 大人がこどもから学ぶこと
11. こどもは目を離すと危ない
12. こどもの病気は苦痛が大きい
13. こどもは一人の人間である
14. こどもは周囲の影響を受けやすい
15. こどもへの思い
16. こどもはわがまま
17. こどもの状況・気持ちを理解することが必要
18. こどもはよくわからない
19. こどもとのかかわりは大変で難しい
20. こどもは成長発達している
21. こどもには未来・希望・可能性がある
22. こどもには適切な技術が必要
23. こどもには苦痛の緩和が必要
24. こどもは自由である
25. こどもに応じた説明が必要
26. 親と子の絆は強い
27. こどもは身近な存在

さらにこれらは、見たり聞いたりした時に学生がとらえたこどもの感じ、つまり【印象からとらえたこども】と、【大人・看護師の目からとらえたこども】、【小児看護の必要性・配慮点】の3つのコアカテゴリーに分類した。(表2)

(表2) 学生がとらえたこどものイメージのコアカテゴリーと27項目のカテゴリー

印象からとらえた こども	<ol style="list-style-type: none"> 1. こどもはかわいい 4. こどもは弱い 5. こどもは素直で純粹 7. こどもは大人を癒してくれる 9. こどもは苦手・好きでない 11. こどもは目を離すと危ない 16. こどもはわがまま 18. こどもはよくわからない 20. こどもは成長発達している 21. こどもには未来・希望・可能性がある 24. こどもは自由である 27. こどもは身近な存在
大人・看護師の目 からとらえたこども	<ol style="list-style-type: none"> 2. こどもは守らなくてはならない 3. こどもは貴重な存在 6. こどもとの関わりには配慮が必要 8. こどもには能力がある

	10. 大人が子どもから学ぶこと 13. 子どもは一人の人間である 14. 子どもは周囲の影響を受けやすい 15. 子どもへの思い 17. こどもの状況・気持ちを理解することが必要 19. こどもとのかかわりは大変で難しい 26. 親と子の絆は強い
小児看護の 必要性・配慮点	12. こどもの病気は苦痛が大きい 22. こどもには適切な技術が必要 23. こどもには苦痛の緩和が必要 25. こどもに応じた説明が必要

分析 2) について

演習 1 と演習 2 を 3 つのコアカテゴリーから比較・分析すると、演習 1 を終了した時点で学生が描いたこどものイメージは、かわいい、弱い、正直といった【印象としてとらえた子ども】のイメージが多かったが、演習 2 では【印象としてとらえた子ども】に関する記述は減少し、【大人・看護師の目からとらえた子ども】【小児看護の必要性・配慮点】にいて述べる学生が増加していた。

また、演習 2 でみられた【小児看護の必要性・配慮点】に関する記述は演習 1 ではなく、学生の子どもへのイメージは経験した演習によって異なっていることが明らかとなった。

反対に、人形であっても子どもと関わる経験を持つことで、子どもは難しく、好きでないと感じていく学生もあった。演習 2 においては、人形では実感がわからないという記述もあり、臨場感に欠ける演習の問題点も示唆されていた。

IV 考 察

今回の分析により 1. 学生は体験する演習の内容により子どもへのイメージを変化させている。2. 日常生活の援助技術を中心とした演習 1 では、学生は【印象からとらえた子ども】に関するイメージを多く感じていた。3. 診療の補助技術を中心とした演習 2 では、学生は【印象からとらえた子ども】に関する記述が減少し、【大人・看護婦の目からとらえた子ども】や【小児看護の必要性・配慮点】に関する内容の記述になっていた。以上の結果を得ることができた。

小児看護教育においては、学生がこどもの理解を深め、子どもに対する肯定的なイメージを持てるような授業のあり方が求められているが、こうした学内演習の経験は、学生の子どもに対する理解を深める教育方法として、意味があるものと考えられる。しかも、どのような学習経験が、学生の子どもへの理解を深めるかを十分に把握した演習でありたい。

今回は検討するまでには至っていないが、今後はひとつひとつの演習において、どのようなこどもの理解を学生に期待するのか、演習の目的ととらえたい子ども像を明確にし、その目的を達成するための具体的な演習方法を考える必要がある。記述項目の最後にまとめた【演習で不十分に感じたこと】にみられる、臨場感に欠ける部分や、達成感が少ない部分に創意工夫が求められている。今回の分析はそれぞれの演習で描いたイメージを対象に行ったものであるが、さらに他の学習内容との関連や経年的変化について調査分析を進めていく予定である。